

1978年夏期講習の御講話(11)

愛は与え、許すことによって生きる

もし人が、いつも非難や欠点ばかりを考えていれば、
その人の心〔マインド〕は不純になり、穏やかではいられない
もし人が、いつも良い性質のことを考えていれば、
その人の心は平安で穏やかになる
もし人の心がいつも神を思っていれば、
その人は神と一つになる
これは、真理を述べたサイの言葉

清らかな真我の化身（パヴィットラ アートマ スワルーパ）である皆さん、

人間の心はその人の思いによって決まります。人間の精神状態は、その人の思いと置かれた環境しだいです。これに関連して、あなたの行動の結果はあなたの心の状態しだいであると言われています。この世の多くの人々は、主なる神の神聖なヴィジョンを手に入れたいと望んでいるでしょう。その過程の中で、人々は神聖なバーガヴァタの帰依者になるでしょう。そうなりたいと思うだけでは、その状態を手に入れることはできません。そう願うことは簡単ですが、その種の至福を体験するのはとても難しいのです。実行に移すことよりも、指示したり説教したりするほうが簡単です。百のさまざまなことをただ話すより、たった一つのことでも証明してみせるほうが良いのです。

その至福と喜びの館には、ドワーラカー〔クリシュナの都で「門のある場所」の意〕のクリシュナが住んでいます。その神聖な至福と喜びを体験するために、実際に大勢の帰依者たちがドワーラカーへ行きます。ゴーピーカー〔牧女〕やゴーパーラ〔牧童〕たちはそのような帰依者たちでした。すべての人が簡単にこの至福の館に入れるわけではありません。この館には四つの入口があります。この四つの入口のそれぞれに一人の門番がいます。至福の館〔アーナンダ・バヴァナ〕と呼ばれるこの館には、三つの階があります。その三つの階とは、サティヤム〔真〕、シヴァム〔善〕、スンドラム〔美〕です。四つの主要な入口では、「サマ」（制御）、「ヴィチャーラ」（探求）、「サントリプティ」（満足）、「ヴァイラーギャ」（無執着）が姿をとった、四人の門番が見張っています。門番を納得させるか、あるいは、その館の神聖な住人であるクリシュナ本人との親密な関係か縁故がないかぎり、館の中に入ることはできません。その正当な入館資格があれば、館に入ることができます。もし二つのうちのどちらにも当てはまらないなら、その人は館に入ることができません。

「サマ」（制御）は、至福の館の入口の一つを守る者です。「サマ」（制御）という言葉が意味するところは、「内なる感覚器官〔マナス（心）、ブッディ（理知）、アハンカーラ（我執）、チッタ（心素）〕のコントロール」です。たびたび私たちは、「サマ」や「ダマ」という言葉を耳にします。「ダマ」は外側の感覚器官〔五感〕を制御することです。「サマ」は内なる感覚器官の制御を意味します。ここで私たちは、「サマ」という言葉を「感官の制御」という意味で理解することができます。自分の内なる感覚を制御できる人は外感覚も容易に制御でき、外感覚が問題を起こすことはまずありません。内なる感覚を制御できない人は、外感覚も数多くの問題を引き起こします。

もし、外界のものは何も見ないという強い気持ちを持っているなら、たとえ目が開いていても、その人は何も見ないでしょう。もし、何も食べないと決意しているなら、食べ物がどれほど魅力的であっても、その人は何も食べないでしょう。外感覚を駆り立てるものは内なる感覚です。このように、内なる感覚を制御することは難しい問題ですが、もしそれができれば、外側の感覚を容易に制御することができます。世俗の領域で取り組もうが、霊的な領域で取り組もうが、人間として生まれてきた者にとって感覚のコントロールは正に絶対に不可欠です。この鍛錬は、私たちにたくさんの幸せを与えてくれるでしょう。

多くの場合、政府は重要な対策を講じます。物価が上がれば価格を抑える手段をとるでしょう。私たちが移動に使うバスには速度規制が設けられています。列車も速度規制を守って走っています。このように、日常生活の中でさえ、さまざまな種類の規律を守るには制限が必要です。同様に、もし私たちの感官が制御されなければ、大きな困難に直面することになるでしょう。欲望に歯止めをかけ続けることを目的としたこれらのサーダナ〔霊性修行〕は、私たちの安全のためにあるものであって、単なる愚かな基準ではないことを自覚しなければなりません。

感覚器官をコントロールするのは難しい問題であることは事実です。ですから、このサーダナの過程において、誤った方向にいて時間で時間を無駄にすべきではありません。ゴピーやゴパーラたちのように、もし自分のヴィジョン〔視野〕を主なる神に向け、愛を込めて一切の行いをして主にゆだねるなら、私たちは幸福を手に入れることができます。このように、自己抑制の道は容易な道ではありません。しかし、もしプレーマ〔愛〕の道を歩むことができれば、私たちは抑制を手に入れ、神の館に入ることができます。

至福の館の第二の入口は「ヴィチャーラ」すなわち「探求」です。これは、バガヴァッド・ギーターの中で、善と悪を識別する能力や、アートマと非アートマの相を識別する能力であると説明されています。バナナを食べるといった小さな事柄であっても、どこを食べてどこを捨てるべきかという識別ができないかぎり、バナナという果物を味わうことはできません。善と悪を見分ける能力は、人間にとって不可欠です。お米の料理を作りたいと思ったら、最初に米粒の中から石の粒を取り除かなければなりません。もし

野菜を使った料理を作りたいと思ったら、野菜の傷んだ箇所が取り除かれていることを確かめなくてはなりません。それと同じように、私たちはまず、永遠なるものと一時的なものを識別しなければなりません。

あなたが「これは私の体です」という時、あなたはその体とは別のものであることは明らかです。ですから、あなたは実際、アートマであって、単なる肉体ではないということは明白です。真実と非真実を区別しなければなりません。いつ何時、肉体は朽ち果てて死ぬかもしれません。そんな一時的な肉体を永遠の真理と見なすことは正しくありません。

私が皆さんに何度も話してきた例があります。これは銀のコップです。もしこれが気に入らないなら、銀細工師のところへ行って銀の皿に作り変えてもらうことができます。何日か使った後、その皿が嫌になったら、またコップに変えることができます。こうして、コップは皿に変えられ、皿はコップに変えられました。しかし、その間ずっと、銀は共通要素として存在しています。形は変わっても、素材は常に同じ銀です。〔同様に、〕アートマという不変なる基盤の相は、ありとあらゆる形において同一なのです。

バガヴァッド・ギーターは、これを真の知識として説明しています。「クシェートラ」〔場、土地〕とは、肉体あるいは住居のことであり、「クシェートラグニャ」〔クシェートラを知っている者〕とは、その肉体に住む神聖な相を指します。ここで私たちは、「住居」と「住居に住む者」の違いを理解しなければなりません。まずこれらの言葉の使用法を理解しましょう。「クシェートラ」という言葉は「クシェー」と「トラ」という二つの単語から成っています。一方、「クシェートラグニャ」には「クシェー」「トラ」「グニャ」という三つの単語があります。「クシェートラグニャ」という言葉に追加された語は「グニャ」です。この追加の語があることから、この言葉は、グニャーナ〔英知〕を持つ者、つまり、賢者〔グニャーニ〕を指しています。そのようなグニャーニ〔賢者〕がクシェートラ〔肉体〕に住んでいるので、そこに住む者はクシェートラグニャと呼ばれるのです。ですから、肉体そのものには英知〔グニャーナ〕はありませんが、肉体に住んでいる神はすべての英知を持っており、神がその肉体にあらゆる活動をさせているのです。神と、肉体に住んでいる者は同一であるということを実感認識している人は、神の館に入ることができるでしょう。

感官をコントロールすることを学ぶにつれて、あなたに英知が芽生えてくるでしょう。そして、英知は、アナータマ〔非真我〕とは違うアートマの面をあなたが理解できるようにしてくれるでしょう。そうして、あなたは至福の館に入ることができます。英知から生じた識別力が育ったおかげで、あなたはアートマの神性を悟り、自動的に自己の満足を得て、その館に入ることができるのです。

しかし今日、人々は自己の満足を得ているのでしょうか？ いいえ、人は決して満足しません。人は常に何かさらなるものを要求します。これを示す小さな例があります。とても空腹な人がわずかな食べ物を求めて祈るとします。たまたま幸運にも少し食べ物が手に入れば、その人は次に衣類を求めるでしょう。そし

て、食べ物と衣類の両方が手に入れば、家を欲しがるでしょう。ひとたび家が手に入ると、次は結婚したくなり、その後は仕事を欲しがります。子供ができると、仕事で出世したくなります。人間の欲望に限度はあるのでしょうか？ もともと何も食べるものがなかった人にとって、これは実際、多すぎる要求であり、そのような欲望は人にさらにもっと求めさせ、より多くの心配事を募らせることにつながるだけです。

ある時、シャンカラーチャーリヤは、「誰が貧乏で誰が裕福なのですか？」と尋ねられました。彼は言いました。「満足している者が裕福な人であり、多くの欲望を持つ者が貧しい人です」と。自分の持っているものに満足することは、第三の入口〔満足（サントリプティ）〕を通して神の館に入ろうとすることです。悲しみに遭おうが喜びに遭おうが、私たちは満足しているべきであり、それを自分自身の利益となる神の贈り物と見なし、満足と平等心の精神〔常に同じ心の状態〕を育てるべきです。

至福の館の四番目の入口は、「ヴァイラーギヤ」〔無執着、捨離〕によって守られています。ひとたび完全に満足すれば、人は自然にヴァイラーギヤ〔無執着、捨離〕を手に入れるでしょう。この無執着は、あなたが何も持っていない時に得られるものではありません。人があらゆる快適さや富を持ち、それらの一時的という性質を完全に理解しつつ、しかもこのような世俗的な取得物を手放すのであれば、それは無執着と呼ぶことができます。

身体的に自分の家を出て家族と離れて森へ入ることを、ヴァイラーギヤ〔無執着、捨離〕と呼ぶことはできません。自分の要求に歯止めをかけ、それらを制限し、それで満足できることが真のヴァイラーギヤ〔無執着、捨離〕です。例えば、家に一袋の米があり、その米を食べて一か月間生活していこうと思ったとしても、あなたが一か月間生きているかどうかしてわかるでしょう？ 今日、あなたに子供ができ、20年後にその子に高等教育を受けさせるのにアメリカへ留学させたいと考えて貯金を始めるとします。それにどんな意味があるでしょう？ 来月、何が起こるか、どうしてわかりますか？ ですから、今この瞬間に自分のものとなっているものだけを楽しむことを望むべきです。次々と、ものを渴望して追いかけてはなりません。あなたは家庭に留まってもかまいませんが、自分の中に家庭を取り込んでではありません。この観点を説明するために、ラマクリシュナ・パラマハンサは言いました。「舟を水に浮かべるのはよいが、舟に水を入れるべきではない」と。皆さんは世間で暮らすべきですが、将来のためにあれこれ、ものを積み上げて心配してはなりません。

真のヴァイラーギヤ〔無執着、捨離〕とは、その時その時に応じた義務を果たし、その時に関係のあることを考えることを指します。このことは、詩人のヴェーマナも次のように述べて説明しました。「今この瞬間に起きていることについて話しなさい。将来について話したり、他人を傷つけたりしてはなりません」。この観点を培うなら、あなたは真のヴァイラーギヤ〔無執着、捨離〕を育てるでしょう。これは自分のもので、あれは神のものだと言って区別してはなりません。実際には、すべては神のものであり、皆

さんはそのような感情を育てるべきです。

クリシュナの館に入って彼の神性を体験したいのなら、あなたは以上の道のどれかを進まなければなりません。もし「サマ」、すなわち「自己抑制」を手に入れることができれば、あなたは簡単に平等心〔常に同じ心の状態〕と識別力を育てることができます。そして、これを通じて「満足」〔サントリプティ〕という側面を育てることができるため、たとえ知識や努力に欠けていても、あなたはヴァイラーギヤ、すなわち「無執着」あるいは「捨離」を得られるでしょう。

もし「サマ」〔自己抑制〕の側面を育てることができないなら、少なくとも、創造世界全体はプレーマ、すなわち神聖な愛に満ちていると考える努力をすべきです。ゴーピーとゴーパーラたちは、この愛を体験していました。あるときナーラダ仙が、ゴーピカー〔牧女〕たちはあまりにも無教養であると考え、彼女たちに少しヴェーダーンタを教える目的でプリンダーヴァンへやって来ました。ゴーピカーたちはクリシュナへの思いに浸っており、いつどんな時もクリシュナのことだけを話していました。彼女たちの行動はクリシュナへの思いでいっぱいでした。ナーラダは牧女たちの所に行って言いました。「そなたたちは神性の特徴についてまるでわかっていない。私が神に到達する聖なる王道について教えてあげよう。さあ、聞きなさい」。ゴーピカーたちはナーラダを見ると、あまり時間を無駄にしないで済むように、話すことがあるなら手短かに話してほしいと言いました。ナーラダは、ヴェーダーンタはそれほど簡単に教えられるものではないのだから、忍耐強く聞いてもらいたいと言いました。するとゴーピカーたちは、自分たちにはナーラダの話を聞くだけの時間も忍耐力もない、自分たちは常にクリシュナを思うことだけにしか関心がないと言いました。つまり、牧女たちは、ヴェーダーンタの教えを聞くことを時間の無駄と見なしたのです。ヴェーダーンタを説教していても、説教した内容を実践に移せない人は大勢います。牧女たちはナーラダ仙に「あなたは自分の説くヴェーダーンタの教えを実践していますか？」と尋ねました。牧女たちは、実践していないヴェーダーンタは欲しくないと言いました。ゴーピカーたちは、自分の中にプレーマ〔愛〕の純粋な観点を持っていたのです。

クリシュナはドワーラカーの都に到着し、最初の2日間、マハーバーラタの戦争について詳しく語りました。クリシュナはすべてのゴーピーとゴーパーラと他の人々を呼び集めました。一同は喜んで集まり、クリシュナの話を聞くことを待ち望んでいました。クリシュナは言いました。「マハーバーラタの戦いのために私がドワーラカーを離れていた日々の間、君たちが何か問題や困難、悲しみを体験したことはあったかね？ 君たちや君たちの家族は皆、元気でやっているか？ 祈りはつつがなく続けているか？」このように、クリシュナは彼らの問題や快適さについて質問しました。すべてのリシ〔聖仙〕や民衆や他の人々は、一つの点を除いては何の問題もなくすべてうまくいっていますと言いました。クリシュナは神であり、人々の心の内を読むことができました。クリシュナは笑い、何が彼らの問題だったのかと尋ねました。人々は、大きな問題はクリシュナの不在であり、彼らはクリシュナとの別離に耐えることができなかった

のだと言いました。人々はクリシュナに、二度とドワーラカーを出て行かないでほしいと嘆願しました。クリシュナはドワーラカーを出て行かないことを約束し、それ以降、36 年間、ドワーラカーから離れることはありませんでした。

クリシュナは帰依者の祈りに屈する神聖な主です。主の中には何の欠点もありません。主は鏡のようなものであり、あなた自身の思いをただ単純に映し出します。もし神が自分に話しかけてくれないと思うなら、それは単にあなたの落ち度です。もし神が自分と結びついていないと思うのなら、それはあなたの落ち度です。あなたは、神があなたの中で、あなたと共にいられるような行動をすべきです。神に好き嫌いはありません。神は、単に照覧している意識であるのみです。これらすべては、あなた自身の心の歪みであり、ねじれなのです。あなたにできる最善のことは、純粋なハートを主に捧げることです。

プレーマ〔愛〕の道を通して、あなたは主をあなたのもとへ来させることができます。そのような方法で自分自身を変容させ、あなたのハートを愛の領域にしなければなりません。あなたのハートに愛がなければ、神はそこに住むことができません。もしクリシュナがあなたのハートに留まる必要があるのなら、あなたは自分のハートを完全に清らかにして、神の愛でいっぱいになければなりません。そうすれば、主はあなたのハートでムラリー〔横笛〕を奏でることができます。あなたのハートが汚れで詰まっていれば、主はムラリーを奏でることができません。

愛の木からは、酸っぱい果実ではなく愛の果実が手に入るでしょう。もし愛の木を育てることができれば、容易に清らかな神性を手に入れることができます。愛の道こそが、神への唯一の道です。愛は神、愛に生きなさい。すべては正しいのです。他の人たちも愛に生きるようにさせなさい。愛は与えることと許すことによって生きます。エゴは得ることと忘れることによって生きます。愛とはエゴがないこと〔無私〕であり、エゴとは愛がないことです。愛がすべてです。これがあなたの、主へのアプローチ〔近づく道〕であるべきです。この愛の観点は、今の若者にとって最も重要な観点です。そのような愛がないのは、怒り、色欲、嫉妬等の悪い諸性質のせいです。ハートの中で愛を大きく育てることは、絶対に必要不可欠です。皆さんの人生は愛にあふれているべきであり、皆さんはバーラタ〔インド〕の神聖な文化を吸収して、平和に満ちた雰囲気をも母国に広めなくてはなりません。

サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch11